酒井邦嘉（さかいくによし）（総合文化研究科・教養学部教授／言語脳科学）

❶『特殊および一般相対性理論について』アルバート・アインシュタイン／金子努訳（白揚社、二〇〇四）

アインシュタイン自ら、相対論を一般向けに紹介した本。数式は限られたところにしか使われていない。相対論の解説本は星の数ほどあるが、発見者当人が著した原著論文と本にまさるものはない。その普遍的事実を知るためにも、本書を読む価値がある。

❷『統辞構造論』ノーム・チョムスキー／福井直樹、辻子美保子訳（岩波文庫、二〇一四）

二〇世紀の「認知革命」の端緒を開く古典的傑作。人間の言語の基本的原理（普遍文法）から、創造性を持つ人間性の本質を明快に説明する。言語に関して、心理学や情報科学などにある今なお根強い誤解は、半世紀前に見事に論破されていたことが分かる。認知意味論の研究者はチョムスキーの考えが古いと批判するが、その批判自体が古いのである。

❸『芸術を創る脳――美・言語・人間性をめぐる対話』酒井邦嘉編／曽我大介・羽生善治・前田知洋・千住博（二〇一三）

音楽・将棋・マジック・絵画の第一線で世界的に活躍中の四人が、その創造性の奥義を惜しみなく語った貴重な記録。芸術には垣根がなく、学問もまた芸術と渾然一体であることが明らかとなった。芸術は決して趣味の延長ではない。人間として生きることそのものなのである。

❹『科学者という仕事――独創性はどのように生まれるか』（中公新書、二〇〇六）

科学の研究について、心に響く先人の言葉を紹介しながらまとめた本。その本質を考えれば、理系と文系に垣根がないことも また明らかである。

『言語の脳科学――脳はどのようにことばを生みだすか』（中公新書、二〇〇二）

私の講義テキスト。第十六版となり、改版の度に最新の知見で更新してきた。「言語学は文系、脳科学は理系」という二分法にピリオドを打ちたい。